

質疑応答

○永井一郎議員（東海村）

近藤先生、原子力委員会の安全審査などに携わっておられる。安全審査のことにに関して、一言御質問させていただきたい。

このたび動燃の事故がございました。あれは、たしか20年ぐらい前、昭和54年か5年のころ、東海村でも、その原子力安全協定による事前審査をやっており、議会でも審査をした。その説明書の中に、爆発とは書いてないが、アスファルトに関する火災については想定していた。要するに、煙突からみんな外に正常に出る。火災があってもフィルターは詰まらないということが書いてある。結果的には、今度の事故で御承知のように、簡単にフィルターが詰まってしまった。空気を入れておりましたから、すき間からどんどん外に漏れたという事象があったんですが、安全審査では、その申請が大丈夫だということで審査は通っている。普通我々議員も、一般の村民も、偉い先生方が審査したんだから大丈夫だと。いや、そうではないんだなあというふうに思いまして、今回、御質問申し上げる。どういうふうに安全審査を評価していったらいいのか、ぜひ一言お願いしたい。

○近藤駿介先生

御質問の趣旨が、安全審査は完全だと思っているのに完全でない、けしからんということであれば、審査が完全であるべく努力をするわけですね。そのとき、そのときにある科学的知見に基づいて、最大限努力をして、その範囲で議論をし、いいと思ってものを決める。それが10年たってみると、いろんな研究が進んで違う、これは間違っているとか、もっといい方法があるとか、さまざまな知見が出てきたとすれば、それを安全審査に反映して改めて議論をする。これは伊方の裁判でもそう言われているわけですけど、つまり、20年前から煮詰めたことは、ずっと正しいなんてということは続くわけではない。だから、裁判所もそのときどきの正しい新しい知見を反映して考え直すことがある。安全審査は一遍決めたら未来永劫正しいというものではなくて、やっぱりさまざまな知見を踏まえて適宜直していく、そういう性格のものであるということは御理解いただきたい。

それから、火災の問題については、私は原子炉の方なんで関係してないんですけども、私の理解は、このプラントの事故の場合には、火災が起こった場合にはとめなさいと書いてある、マニュアルには。そうすると、そもそもとめると書いてあったのを忘れてしまった。そこにどんどん送り込んでしまったら、出なきゃならないんで、火災が起これば、いろいろごみとか、すすが発生するんで詰まることがある。だから、むしろとめなさいと書いてあったのをとめるとのを忘れてしまったという手順の誤り、マニュアルどおりやらなかったことがむしろ問題だということがあるというふうに伺っている。その辺、私はここであなたと議論をする気はないが、事実関係を私自身が理解してないんで、余りこれ以上申し上げられないんですけど、確かに安全審査は一生懸命見るんですけどパーフェクトじゃない。だけど大事なことは、とんでもない事故になるかならないかということに関しては十分、例えば格納容器があるとかないとか、そういう大事なところは抑えているつもりですが、操作の手順書が正しく合っているかどうかまでの細かいことについては、今のルールでは設置者がみずからこうやって運転しますよということ、行政官庁に届け出ると。その手順書でいいねということをお約束する。ですから、設置許可という行為は、基本設計がいいということをおっしゃっているに過ぎなくて、細かいところを見てないことは確かなんです。だから、こういう安全審査のやり方でいいかということ、今、議論しているところであり、もう少し国が微に入り細に入り見る必要があるのかなという議論がある。

ただ、「もんじゅ」のナトリウムの議論でもあるように、原子力に関係ないとか、放射能が出ない圧力の装置まで安全委員会が一生懸命見る必要があるかとなると、若干矛盾が生じて、ほかの産業システムまで原子力安全委員会が見てしまうことになる。そこはルールのつくり方が難しく、それ

は違うんじゃないか、やっぱり放射性物質に関係するところに限るべきなのかなというような議論とか、いろいろあるが、基本的な方向としては、なるべく新しいものについては、微に入り細に入り見るような方向にするということが、安全委員会で研究開発段階の施設についての考え方ということで議論して、私も呼ばれてそういう意見を申し上げた記憶がある。

○井上森雄議員（鹿児島県川内市）

近藤先生、お話の最後の方でいろいろな確率の低い事故をシナリオとして考えるのは考え過ぎではないかと。天井が落ちるかどうかが心配するのは神経症になるというふうにお聞きしたが、実は川内原発の近くで鹿児島県北西部地震が1回目、2回目と起こりまして、それでスーパーの天井が落ちたり、高校が1階部分がぐしゃっとつぶれたりした。両方とも生徒や人がいなかったという、まさに考えられない偶然があって、そういう点で、原発は本当に大丈夫かという市民の不安というのは、ずっとぬぐいきれないまま神経症になっている市民もいる。

それで、先生のお話に対する私の感想ですが、軽水炉オンリーという感じでずっとお話されたが、現在、そういうことで進んでいる根拠について、もう少し説明いただきたい。

それから、原子力政策に対する国の役割の中で、内外の独善性、閉鎖性をコントロールするということでしたけれども、これは本来的に、本質的になぜこういうのが出てくるのかという点を説明していただきたい。

中島先生には、核燃料を燃焼させながら振動を与えた場合、どういうふうになるかという実験例があるかどうか。

それから、抜本的転換を強調なさいましたけれども、川内原発では、地震と原子力災害が同時に起こり得るんじゃないかという心配がある。我々議員としてはどういう対応を市民のためにすべきかという点を質問いたします。

○近藤駿介先生

最初のコメントはスーパーの天井の落ちた話ですが、原子力発電所の場合には、どこにでも立地をする限りにおいては、その地下の10キロメートル地点にマグニチュード6.5の直下型地震が起こることを想定して設置しなさいと。しかしスーパーも学校もそうやって設計してないんで、それはそのそばで6というのが起こってしまったら、天井落ちて私の責任じゃないと。

2番目、軽水炉オンリーと言われましたけど、御質問の趣旨がわからなかったんですけど、重水炉とか、さまざまな原子炉がある中で、なぜ日本は軽水炉だけかと。これは日本はむしろ多過ぎるという議論もある。つまりフランスは、軽水炉のうちでも加圧水炉だけです。その方が単一生産でもって大量生産が可能で、経済的な原子力発電を提供できるからといます。日本は伝統的に2つ、加圧水型と沸騰水型で、重水型というものは、これは何か。軽水炉というのはアメリカ技術ですから、アメリカから何か言われたときに対抗できる技術を持ってた方がいいんじゃないかという考え方で、重水炉を開発したわけですけど、今やこれだけ日本は強くなっちゃって、アメリカが日本の悪口言えない。この間、橋本さんがニューヨークで変なことを言ったら、すぐアメリカがくしゃみをする。そういう日米関係であるとするれば、もうこれ以上はあんまり変なことは言わないだろうということで、重水炉、アメリカから文句を言われない原子炉を持たなくていいんじゃないかなということで、「ふげん」、ATRをやめた理由の一つです。

それから、内外の独善性、閉鎖性というのは、公共施策を充実するのが国の役割、これは御議論はないと思いますが、独善性がなぜ生ずるかという御質問と、これはそれぞれの国はそれぞれの国民の意思の集合体ですから、それぞれ人間というのは独善主義者が大体大部分であると思う。性善説に立てばそうではないのかもしれないけど、やっぱりさまざまな意図、ベストインタレストを持っている方がいる中で、国の政策はそういうものに動かされる可能性なしとしない。それは既にアラブのオ

イルエンバー号がその例を示している。あるいはそのうちマラッカ海峡閉鎖ということ、だれかがやるかもしれない。そういうことを常に念頭に置きつつ、我が国民が常に、そういうときでも対処のできるような環境をつくるのが国の政策という意味で、さまざまなエネルギー政策は考えられるべしということで申し上げたつもりである。

○中島篤之助先生

阪神・淡路大震災が起きて、ちょうどスウェーデンでは原子力発電所は2010年までに全部とめるんだと。あの国は50%が原子力に頼っている国です、半分が水力。ところが労働組合なんかを中心に、スウェーデンの産業競争力を維持するためには原発があるんじゃないかという議論が起こってきている。阪神・淡路大震災が起こったときには、何とかという新聞で、非常に日本に対して同情的な記事がいっぱい出た。ところが労働組合がそういう反論を始めたら、そのとき出た新聞の真ん中にどっかで見た原子炉だなどと思っていたが、浜岡なんです。日本というのは、変な国だというわけですね。つまり、東海大地震が起こるといふところへ、しかも国家がそのための観測のプロジェクトをやっているところへどんどん原子炉をつくっている。日本というのは片っ方で大地震が起こり、その地震が予想される地域に原発を集中立地させている、変ではないかと。これはむしろ常識ですね。しかし、よその国というのは、やはりそういう見方をするものだということで、私は非常に学んだわけです。

原発の立地というのは、絶対地震が起きないところとか、そういうところを選べなくなっている。ですから、今後も立地に非常に困っているようですから、固い岩盤でない、新しい地盤に原子炉を立地しようとか、あるいは海上立地しようとか、いろんなことが今考えられて、まだこれは余り表に出てきてませんが、そういうことが出てくる可能性もあるわけですね。ですから、立地議会サミットの方々は、多分現在の政府の原子力推進政策は変わらない限りは次々と色々な問題が出てくるだろうと申し上げておきたい。

原子炉を実際に動かして振動を与えたというのではない。ただ、大きな振動台を使って、原子炉の模型で、これはウランは使いませんから、鉛の酸化物を使うとか、そういうことで核燃料をつくってやる実験は四国の多度津に原子力工学試験センターで、そういう実験をやって、それで模擬していろいろな対策を立てているということです。

